

文部科学大臣賞

『思い出のジャージャーめん』

東京都府中市立府中第二小学校 六年 男子 寺田 隼

「ガッシャーン！」

やってしまった。みんなからの冷たい視線がレーザー光線のように教室の中心に集中している。先ほどまで商店街のようにガヤガヤしていた教室は、まるでうそだったかのようしんと静まり返った。給食を受け取ったぼくは、自分の席にもどる途中、友達の机に足を取られ転んで、給食のおぼんをはなしてしまったのだ。

「ベチャ。」

手に何かが付いた。どうやら、ジャージャーめんのソースがくっついてしまったらしい。それに、服には割れたお皿からこぼれたスープがしみこみ始めている、困った。それでもぼくはなんとなくすぐには、顔を上げたくなかった。なぜなら、顔を上げたら、ぼくのことを鼻をつまんで汚い物あつかいし始めたり、かわいそうだなあとあわれみの目を向けつつ遠くから半分面白がって笑っていたりする友達の姿が目にかんだからだ。その時、

「おい寺田、大丈夫か？服汚れちゃってるから体そう着に着がえてこいよ。割れた皿の片づけとか、飛び散った給食とか色々やつとくから。」

ぼくのもう想とは裏腹に、友達にぼくのこぼした給食の後片付けをやってくれと言った。それだけでなく、すぐに服が汚れてしまったぼくの気持ちに配りよしてくれるとは、なんていい友達なんだ。ぼくは思わずなみだを流してしまった。しかし、自分でしかしたことを人に任せつきりだと、何か変な気持ちになるので、急いで体そう着に着がえて友達といっしょに自分の後始末をした。給食は新しいものに取りかえてもらったけれど、友達への申しわけなさでいっばいで、いつもの給食の味と一味ちがった。給食を完食した後、いっしょに給食の片付けをした友達が言った。

「いっしょに謝りに行こう。」

ぼくは、皿が割れたのは自分の失敗だから

「自分で謝りに行くからいいよ。」

と言った。ぼくがやったことなのに、いっしょに謝りに行こうとしてくれるその気持ちがとてもうれしかった。

その日から、ジャージャーめんが出てくるとあの日の友達に助けられる自分が思いうかぶ。一口給食を口に運ぶだけで、申しわけなさと、友達に助けられたその温かさを思い出す。こんな風に思えるのは、たくさんの友達と共に生活して給食を食べているからだ。学校生活ならではの貴重な体験だ。残り半年の学校生活、小学校最後のぼくのクラスには、ピンチの時にもたよりになる優しい友達がたくさんいる。おかげで毎日が楽しい。あの時の出来事があるから、ぼくにとつてジャージャーめんはだれかがピンチの時、今度はぼくが助けてあげようという気持ちにさせてくれる思い出の給食だ。